

2003 年 福澤杯 総括コメント

予選審査員：ナカオシュンスケ

I. 予選審査の大前提

(ア) 予選審査員の役割

これまで多くの大会において、予選審査員というものは A4 一枚の Judging Sheet の中に数行のコメントを記すに過ぎず、各 Speaker はなぜ自分の Speech がこのように評価されたのかということを知ることができませんでした。これは、落選者と当選者の双方にとって不幸なことです。予選で惜しくも落選してしまった Speaker は、自分の Speech の弱みを最後まで知ることができずに、往々にして他の大会でも落選を重ねます。逆に、予選を通過した Speaker は自分の Speech の強みと弱みが何であるかを把握することができないので、ほとんどの場合、大して書き直しもしないで本選にのぞみます。しかし、こうした努力の怠りは、本選審査員にこき下ろされるという最悪の結末になって自分の身に降りかかってくるのです。

私は予選審査員の最大の存在意義は「教育」にあると思っています。落選してしまった者には次の大会で当選するためのヒントを与え、当選した者には優勝に向けて何を準備すべきかを認識させる。これこそが予選審査員の腕の見せ所であり、醍醐味であると思っています。

(イ) 今回のコメントシートについて

とはいっても、何から何まで予選審査員が手取り足取りリライトのお世話をしてくれるかといったら大間違いです。基本的に今回は、「これはどういうこと？」という根源的な問いを皆さんに投げかけるようにしました。しかもストレートな表現を多用しました。良いと思ったものには素直に良いと書き、おかしいと思ったものにはダイレクトに批評を行いました。

というのも、私の過去の経験からして、ストレートな表現を多用して皆さんを刺激しないと、皆さんは決してリライトを行わないからです。自分の Speech には欠陥があると見られているということを強く認識し、納得した点があれば即座に論点を補強しなくては優勝することなど絶対にありません。よって、今回は例年になく厳しい表現を用いて批評を行いました。ただし、良いものにははっきりと良いといっています。ただ単に嫌味で批評を行っているわけではないということをご理解下さい。

II. Contentsに共通して見られる悪しき欠点

(ア) 専門家に話せばすべて解決するという無責任な幻想

50Ways にも書いたのですが、専門家に話せばすべてが解決するという論調の Speech が非常に多かったのには本当に残念です。恐らく、このような無責任な意見を書いている Speaker の 99.999%が、実際にそうした専門家に会ったことすらなく、雑誌記事や TV 等もマスコミで表面的に述べられていることを単純にばくって来ただけなのです。そんな無責任極まりない Speaker が、恐れ多くも数百人の聴衆の前で、自分が真に検証しなかったことを訴えかけていることを想像してみてください。これは誠に不健全なことです。

専門家がどうのこうのというのであれば、まずは自分が直に専門家と対峙し、彼らがどのように悩んでいる人を救ってくれるのかを見極めなくてはなりません。その際に考察するポイントは以下の通りです。

専門家に話さないと人々は具体的に のような情報しか得られない。
それによって のような行動を取ってしまう。
それが のような問題を引き起こしてしまう。
逆に専門家に話すと具体的に のようなアドバイスをもらえる。
それが のように作用して、 のような行動を取ることを抑制する。
よって、 のような問題は起こらない。
仮に のような問題が起こってしまったとしても、専門家には のようなバックアッププランがあるので、問題は最小限に留められる。

ほとんどの皆さんは、 から のように考察するのではなくて、「専門家に話せば問題は起きない」と、単純に だけを Speech の中で述べているのです。本当に専門家と議論したことがある人ならば、 まで考えなかったとしても、必ず から のようなステップを踏むはずです。専門家に会ったこともないくせに、いい加減なことをいけしゃあしゃあと述べようとしていた人が仮にいたら、その人は自分の誠実さの無さを猛省して下さい。

(イ) 権利の大安売り

今回の予選審査では、「 は私達の権利だ」という台詞を何度も目にしました。例えば、「信頼できる検査を受ける権利」・「十分なカウンセリングを受ける権利」等々がそうです。そして、それらの主張は、「権利なのだから国が環境を整えてやらなくてはならない」という非常に安直な提案につながります。

ここで考えて欲しいのは、「国がやるべきだ」=「税金で払う」ということです。皆さんもご存知の通り、現在の日本は巨額の財政赤字を抱えています。だからこそなおさら、税金を使うからにはその費用に見合った便益を生むようなもののみが支払の対象にならなくてはならないのです。しかし、多くの Speaker は費用と便益の比較という困難から逃れたいがために、自分達の都合の良い権

利をでっちあげているのです。「権利なのだからコストが何だとか言っている場合ではない」ということなのでしょう。

しかし、こんなことまでいちいち権利といては、ありとあらゆることが権利の対象になり、権利の大安売りが始まることになるのです。現に日本の各地でこういう悪しき主張が連呼されているではないですか。「我々には十分な交通手段が与えられる権利がある」などという大合唱が起こり、いらぬ橋や無駄な道路が建設されているのです。そうした便益に見合わない財政支出は、後々の世代に大きな負担を残し、日本の国力を弱らせていきます。

何でもかんでも国にやらせれば問題が解決するという短絡的思考は、もういい加減に辞めなくてはなりません、逆に、いかに国に負担を発生させない形で問題を解決することができるかを考察するべきではないでしょうか。

一つの方法としては、国が「情報公開」をしっかりと行い、それに基づいて追加的なリターンを得たい人たちは自ら追加的なコストを払ってもらうという自助努力を促すという政策があります。例えば、政府は「この設備で行う検査だと 20% くらいの確率で正しい判定が出来ない。しかし、こういう設備がある施設で行う検査であれば、見逃す率は 3% にまで下落する」という情報を公開すればよいのです。そうすれば、心配な人は大きな施設が少し遠くにあって交通費がかかるとしても、信頼できる結果を求めて自ら進んで追加的な負担を支払うことなのでしょう。余り気にしていない人であれば、近所で検査を受けてその結果を信じればよいのです。

「国土の均衡ある発展」という大号令の下に、日本の小さな町から村に至るまでもが機会を均等に享受できる権利があるとされ、多大な財政の無駄遣いが行われてきたことは皆さんもご存知でしょう。しかし、ここでいう機会とは必要最低限のものであるはずで、はたして皆さんが Speech でうたっている「権利」は必要最低限のものでしょうか。日本各地至るところにまで行き渡る必要があるものでしょうか。もし「必要がある」と考えるのであれば、「権利」という印籠をかざして一切の分析を怠るのでなく、それにはコストを上回る便益があるのだということをしっかりと提示しなくてはなりません。

(ウ) 十分な情報？ 正確な知識？

これまた 50 Ways で既に述べていることなのですが、「十分な情報があれば、正しい知識を身に付ければ、すべての問題が解決するのです」という非常に無責任な論述が相変わらず多く目に留まるのにはあきれ返ってしまいました。それでは、十分な情報とは具体的に何であり、正確な知識とは具体的に何であるのでしょうか。そこにこそ Speech の Originality というものが生まれてくるのです。

ここで皆さんに認識してもらいたいのは、「十分な情報」「正確な知識」というものは、「不十分な情報」「不正確な知識」と常に対比しながら説明しないと、結局何のことだか最後までわからないということです。ですから、以下の様なアプローチで Speech を書いてみてはいかがでしょうか。

1. ほとんどの人は のような不正確な知識を持っている（具体例をたくさん提示する）。
2. そのような不正確な知識しか持っていないので、 のような行動を取ってしまう（具体例をたくさん提示する）。
3. しかし、実際は が正しい知識だということを教えなくてはならない（ここでも具体例を多数出す）。
4. そのような正しい知識があれば、 のような行動を取ることは無くなり、みな のような正しい行動を取るようになる（最後も具体例をたくさん提示する）

少なくとも、この 1 から 4 のステップを踏んでもらわないことなしには、何が正しくて何が正しくないのかが一向にわかりません。正しい知識と正しくない知識を対比しながら、正しい知識とは何であるかを明らかにして、その重要性を訴えるのです。ちょうど、ダイエット食品の使用前と使用後の結果の写真を並べておくような戦略です。

そして、一番重要なのはすべてのステップに具体例をふんだんに入れるということです。具体例を入れること無しに Originality を出すことは出来ないからです。しかし、具体例というものは、その問題に対して必死で頭で汗をかきながら真摯に取り組んできた者にしか提示することが出来ません。ですから、「正確な情報があればすべて解決する」としか言っていない Speaker は、「実は私は何にも考えてこなかったのです」という馬脚を自ら身をもって現してしまっている人たちなのです。

III. 最後に

(ア) わからないことはわからないと言える風土を作ろう

これまでのページで色々と皆さんが腹に立つことばかり書いてきたと思います。しかし、なぜこのような辛辣な意見を書かなくてはならないのかというと、それは私が言わなくても各校の ESS 内や学生団体の中で当然に消化されなくてはならない問題が、全く放置されたまま予選審査員のところに Speech が送られてくるからです。本来はこうした批評は各校の 4 年生や学生団体のキャンプで出されるべきであり、私は本来自分よりも 4 つも 5 つも下の後輩達の憎まれ役など買って出たくないのです。

例えば「正しい知識って何？」ということは、私などがここで言わなくても本来は所属する ESS や学生団体の先輩が指摘してあげるようなことです。そして、「正しい知識と正しくない知識を対比させて表現すれば、正しい知識とは何であるかを聴衆にわかりやすく伝えることができる」などという観点も、まともな国語教育を受けたことがある人間ならば、当然に湧いてくる発想であると思うのです。それが全く考察されること無く審査員の手もとまで原稿が来てしまう。

こうした問題の原因の一つが、「それってどういうことなのかな？」という疑問を呈してあげるといふ風土が、ESS にも学生団体にも全く無くなってしまっている事にあると思います。その Speech を作成した Speaker 本人だけでなく、それを見てあげる ESS や学生団体の上級生さえも、各々のテーマに対して知ったかぶりになっていて、「ここはどういうこと？」という一声が出てこない。そしてすべての問題が取り残されたまま、「結構良く出来ているね」という一見優しいコメントだけが与えられて Speech が送られてくるのです。これは文化的に極めて低レベルな状態です。

私が 50Ways で「100 の疑問をぶつけてみる」と提言したのは、実はこのような問題意識に立ったものです。100 個作らなくてはならないという制約が科されれば、疑問を作る方は知ったかぶりになることが出来ません。疑問に答える側は、100 個の疑問を実際にぶつけられた時点で、自分がその問題に対していかに知ったかぶりになっていたかを思い知らされるのです。そしてそこから自分の無知を理解し、原稿の締め切り前まで全力で自分の Speech を磨き上げることが出来るのです。

(イ) 毎年同じことをやっているだけで勝てるはずが無い

「今年の ESS は非常に有望ですよ。みんなやる気がある子達ばかりですから」という話を毎年よく聞きます。なるほど、実際に会ってみればみな意気込みを持っていて Speech に対しても真面目に取り組んでいる。しかし、半年後に蓋を開けてみれば誰も優勝できていない。優勝できていないだけならともかく、半分以上は辞めてしまっているか Joint 大会にしか出なくなってしまっている。こういう顛末が毎年繰り返されるのです。

こうした ESS がなぜ勝つことが出来ないのか？それは勝つための方法論が間違っているからです。いくら、キャンプで真夜中までブレインストーミングをやって、Judge のコメントにメンバー全員が群がって必死にメモを取っていたとしても、方法論を心得ていなければすべての努力は見当違いの方向に向けられ、優勝という果実は実ることがありません。

例えば、各種学生団体や自分の ESS が発行している Speech マニュアルというものを過去 10 年分取り寄せてみてください。実は多少の違いこそあれ、毎年ほとんど同じ内容が平気な顔をして出版され、それが教本として多くの ESS に浸透しているのです。そして、昨年の内容をばくっただけのマニュアルを執筆したインストラクターは、「素敵な先輩」として様々な大会やキャンプに顔を出し、「勝てない方法論」を伝授していくのです。

今回のコメントにおいて、私も様々なことを申し上げさせていただきました。ストレートな表現に腹を立てた人も多いと思います。しかし、納得した点があった方は是非ともご自身の Speech のリライトに生かしてください。そして、以下のようなフィードバックを行って ESS 全体を活性化させてくれたらと思います。

1. なぜ自分はコメントで言われたようなことに気がつかなかったのか。
2. なぜ自分の ESS 活動の中でコメントのような論点をあぶりだすことが出来なかったのか。
3. なぜ自分が所属する学生団体の活動の中でコメントのような論点をあぶりだすことが出来なかったのか。
4. 今回の Speech を踏まえて、自分が後輩達のために生まれ変わってできることはあるか。
5. 自分の ESS を生まれ変わらせることができるか。
6. 自分が所属する学生団体を生まれ変わらせることができるか。

最後になりましたが、皆さんが福澤杯の栄冠をつかまれることを期待しています。そして、福澤杯で得ることが出来た経験を、未来の Speaker に伝授してもらえれば、これほど幸せなことはありません。

皆さんが壇上で輝くことを願っています。

頑張ってください。

Speakers are not braver than anyone else.

They are just braver seven minutes longer on the stage.